

第 14 回マニフェスト大賞キックオフ大会

参加報告書

林 晴信

日時：2019年5月25日(土)

場所：愛知大学名古屋キャンパス

【報告及び所感】

■第1部:住民意見をカタチにする～新しい議会と住民の関係&先進議会の裏側

・開会あいさつ

川上文浩(可児市議会議員・LM推進連盟共同代表)

北川正恭(早稲田大学名誉教授・早稲田大学マニフェスト研究所顧問)

・「若者×議会 ～高校生が議会へ請願書」

上條俊道(松本市議会議員)

松本市議会では、H27年から松本工業高校と交流事業として議員と高校生の意見交換会を行っていた。内容は「市議会を身近に感じてもらうための取組として、現代社会の授業に議員が参加し、議会の概要説明、高校生の政治参加の事例紹介及び意見交換を実施しました。」とのことで、これは我々西脇市議会が行っている「高校生版議会報告会」と同じスタイルである。

西脇市議会と違うのが、H29年には2つの請願書を議会へ出すという成果を上げている事実であると思う。

「高校生や高齢者など交通弱者に配慮した公共交通の充実を求める請願書」

「自転車利用者に優しい街づくりを求める請願書」

この2件の請願が提出され、全会一致で可決したとのことだった。

しかもこの2件、その後もきちんと続きがあり、公共交通については、中信地区の高校20校を対象に調査を実施し、試算を行い、高校生への運賃補助制度について素案を作成、R1年度の補助開始を目指しているという。また自転車については、市長も「通学路等への自転車レーンの整備拡大を行っていく」「無料駐輪場の設置のために具体的な場所の選定をすすめる」と回答、現在整備が進められているとのこと。高校生との意見交換会が市を動かした好例であり、「自分たちの意見は無駄にはならない」ことを実感させるシチズンシップ教育の1つのカタチになっていると感じた。

またその結果、投票率をみても、松本市内の高校3年生の知事選や国政選挙での投票率は55%前後であるが、松本工業高校生だけに限ると78%~86%と高い投票率になっているそうである。

松本市議会には「ステップアップ市民会議」という市民が議会活動について話し合う場があり、その第3期ステップアップ市民会議(H28年2月~H29年4月)がH28年12月に議会へ提言した内容が以下の通りで、

【提言1】 若者と市議会議員との交流を通じた政治との距離を縮めるような“場”の創出

・若者と松本市議会議員が、身近な話題等について、気軽に話し合うことができる、“ゆるやかな交流の場”（プラットフォーム）を設けること

【提言 2】 若者や子ども向け「議会だより」の発行

・若者や子どもに関連する政策や取組みをトピックとして取り上げて詳しく説明する、といった内容の小・中学生や高校生等に向けた「議会だより」を発行すること

これらの提言に基づき、現在は松本大学（「市立病院と西部地域のまちづくり」をテーマに意見交換）、私立エクセラン高校とも意見交換会を行っているそうであり、子ども向け「議会だより」も去年は2度発行されている。

なお、松本高校での 200 名のアンケートのうち、議員との意見交換会が「良かった」と答えた生徒は 199 名。「良くなかった」と答えた 1 名の生徒のその理由は「議員がしゃべりすぎ」というものだったそうである。

今後の展開としては 1 時限では時間の制約がありすぎるので、2 時限を使ってやれるよう高校と調整中とのことであった。我々も参考としたいところである。

・「議会改革の舞台裏」

松倉良典(可児市議会事務局)

可児市議会のパワフルな名物議員川上氏のお話ではなく、陰の立役者でもある事務局長の松倉氏からの可児市議会の様々な取組についてのお話であった。

市民の声（つぶやき）、「定数・報酬を減らしてはどう」「議員なんていないんじゃない」「議会なんていないんじゃない」「何をしているかわからない」というのは、何も可児市に限ったことではなくて、全国の市町村どこも似通っている状況であると思う。

そこで可児市議会は 2 千人アンケート取って現状を分析し、「議会や議員の活動知らない 64%」「市民の声を反映していると思う 6%」という結果に愕然としつつも、現状を変えることを選択、そこから可児市議会は生まれ変わったという。その牽引が川上氏を含む 1 期目の新人議員たちだったということにも注目したい。

もはや全国的に有名な「可児市議会地域課題懇談会（可児医師会×可児市議会×可児高校）」の取組。議会広報紙も「議会のトビラ」とリニューアルし、定例会の報告だけでなく、「議員の仕事ってどんなこと？」も掲載。CATVでも議会活動のトピックスを放送するなど「議会の活動の見える化」に余念がない。西脇市議会でも私が広報広聴委員の時には何度か動画放映にもチャレンジしたが、今はその気配も無い。

「議会は何のためにあるのか」「議会はどんな活動をしているのか」をもっともっと市民へアピールしていかなければならないだろうと思う。

・「議会×若者の可能性」

田口裕斗(可児市議会高校生議会 元生徒会長・現立命館大学3年)

私の中では、今回一番聞き応えのあったプレゼンテーションだったと思う。プレゼン技術、報告内容ともに素晴らしいものだったと感じ入ることしきりだった。

可児市議会の高校生議会は有名なので、今さら紹介する必要もないと思うが、平成26年に高校生からの意見書として出された「地域課題に若い世代が関わる機会を設けることの意見書」中では、

私たちのような体験を積み、若者は元気になり、自然に「将来は地元で暮らそう」「地元のために何かしていこう」という気持ちになります。そして、このような機会が充実すれば可児市はきっと、若い力が集まる、より魅力的なまちへと発展を遂げると思っています。

と高らかに謳っている。

そしてそれから5年が経ち、現実には田口氏のような若者が育ってきていると思うと、その取組の先見性には敬意を表するしかない。

田口氏は当事者として、こう言っていた。

高校生の自分は、毎日、家と学校との往復で、そこで全てが完結する世界だった。「地域」なんて意識することも無かった。可児市議会のエンリッチ・プロジェクト（地域課題解決型キャリア教育）に参加して、教育・子育て・防災・少子高齢化などの地域の課題をリアルに感じるようになりました。そして地域の課題を共にリアルに考えることによって、「あっ、自分も地域の一員（市民）なんだ!」と感じるようになりました。

そしてエンリッチ・プロジェクトに参加することで、「意外と自分の地域にいいところもあるやん!」「地域にはこんな課題があるんだ!」「地域で生きるのもありだな!」「地域のために何かできるのだろうか?」という思いが芽生え、それはつまり、可児市（地域）の魅力に気づくことによって、将来の選択肢としての「可児市」を考えるようになったのです。

また田口氏は可児市議会議員と接するうちに、議員像も変わったという。

議員って普段何しているんだろう?ニュースでは不祥事しか流れないし、ロクなイメージが無い!というのが、議員さんたちと色んな課題について話し合ううちに、こんな面白い議員さんもいるんだ!住みよい町にしたいな!という政治やまちづくりへの参加意欲の向上にも繋がりました。

実際、田口氏は将来は教師になろうと思っていたそうだが、可児市議会と関わるうちに「もっと自治や政治のことが学びたくなった」と現在は立命館大学法学部で地方自治を学んでいるとのこと。つまり若者の将来にも強く影響を与える取組だったというのは凄いことだとも思う。

さらに田口氏は我々に投げかけをした。

主権者と有権者はイコールですか?と。

しばしば、「主権者」は「有権者」と認識されがちだが、日本国憲法の前文に「主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」とあるように、主権者は全ての国

民である。もちろん、18歳未満の若者も主権者である。

田口氏は「有権者でない18歳未満の若者にもまちづくりに参加する権利はある。有権者ではないが、未来を担う若者にまちづくりへ関われる機会を作ることこそが重要である」という。

ロジャー・ハートの「参加のはしご」の話も出てきた。

ロジャー・ハート「参加のはしご」	
子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する	参画の段階
子どもが主体的に取りかかり、子どもが指導する	
大人がしかけ、子どもと一緒に決定する	
子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる	
子どもは仕事を与えられるが、情報は与えられている	
形だけの参画	非参画
お飾り参画	
操り参画	

※上にいくほど良い

我々も高校生議会や中学生議会をする場合は、気を付けなければならない。

若者と議会・行政が関わると双方にとってWin-Winの関係が築けるし、そうならないといけない。若者も主権者であり、市民なのです。今後の社会を見据え、若者をまちづくりに参画する仕組みを形成する必要があると思います。

未来の市民を議会が育ててほしい！

最後に議会に対するエール？で田口氏のプレゼンは終了した。

我々も高校生版議会報告会を開催しているが、一体何のためにやっているのか、どういう効果を生み出そうとしているのか、あるいは生まれるのか。

やり方改善を含め意義の再確認のためにも、いちど、田口氏を招聘して話を聞くことを提案したい。

「若者議会が活躍できるまち～世代のリレーができるまち」

瀬野航太(第4期 新城市若者議会議長)

伊藤早希(第4期 新城市若者議会副議長)

可児市に続いては新城市の若者議会である。多くの自治体にも影響を与えたこの取組は市長が変わったことに端を発する。若者との対話の機会の創設を掲げ市長選に当選すると、「若者条例」「若者議会条例」を制定、市長が変わっても続くような仕組みを作り上げた。若者議会は市の附属機関となっている。3月の委員募集から11月の市長答申まで、第4期では全体会議15回、チーム分科会を21回開催しているとのことだった。その他のミーティングまで含めると、実は市議会議員より会議をこなしている様子だった。高校生も交じているのだから、なかなか大変だろうとは思いますが、若い人たちが自分の市や地域について真剣に考え議論していることは素晴らしいことだとも思う。

取組成果については新城市若者議会のHPを見てほしい。

<https://wakamono-gikai.jp/>

なお、第1期若者議会の初代議長は、今は市議会議員である。

若者が議員を志すきっかけとなっていることも、非常に素晴らしい成果のひとつであるように思う。若い人が多くなってくると議会は確実に変わることができることは確信している。旧弊を打ち破るのはいつも若者である。

瀬野氏も「地域のことを考えるのは楽しい」と話し、若者議会で活動するうちに大学の志望先が変わる高校生もいるという。この辺りは可児市のエンリッチ・プロジェクトを経験した高校生とも符合する。

最後に、会場の質疑に答えるかたちで、「HPもなくSNSもやっていない議員なんて、本当にいるのか?」と思ってしまう。ネットで検索に引っかからない議員は情報発信ができていない時点で論外だと思う」と話していた。

「自分の市の議員が検索できない!」

こういうことも若者の政治離れの一因なのかな、とも思う。

・「犬山発・新しい民主主義への取組～市民フリースピーチ制度」

ビアンキ・アンソニー(犬山市議会議員・前議長)

粥川仁也(犬山市議会事務局)

元ニューヨーカーで(前)議会議長という異色の経歴の持ち主のビアンキ氏だが、アメリカの地方制度・地方自治と日本との違いを踏まえた議論を展開するも、言っていることは実はスタンダードで当たり前のことであるように思う。

- 日本の議会は与えられた権限を十分行使していない。
- 日本の議会は受け身すぎて、行政とのバランスが良くなく、十分機能していない。
- 議員は議会の一人の構成員として意識が低い。
- 議会での集約した意見を十分重んじていない議員が多すぎる。

耳の痛い話だが、これは全国の議会に通じる話である。

「前例より前進!」を掲げるビアンキ氏は、議会には次の3つが必要不可欠という。

『議員間討議』

議員同士が議論をしないと、議会として物事を決められない。

『議会の政策立案及び政策提言の力』

議員同士の話は提案等へ繋がらないと、ただのトークショーになってしまう。

『市民参加』

議員間討議においての提案は、より市民の希望を反映、よりニーズに寄り合えるように、市民の意見を吸い上げる場を増やして、市民からいただいた意見を議員間討議に反映する。

これらを鑑みて、「市民フリースピーチ制度」は誕生した。

ピアンキ議長（当時）からの「本会議で市民が自由に発言できる制度をつくりたい」「市民の意見を議員で協議し、行政に対し適切な対応を求めたい」というオーダーに対し、粥川氏をはじめとする犬山市議会事務局がそれに応える形で制度づくりをしたという。

それでも粥川氏らは「請願・陳情という制度があるのに、いいのか」「市民との意見交換会で十分ではないのか」「個別要望しかでないのではないのか」「行政が直接市民に意見を聞けばいいのではないのか」等々悩んだという。

しかし、「議場で発言してもらうことに意義がある」「行政が拾いきれない小さな声を拾うことができる」等の意義を感じ制度創設に取り組んだという。

で、フタを開けてみれば、「市民の発言内容・質疑応答のレベルが高い」「良い意見には議場で拍手が巻き起こる」そして全国の自治体関係者からの好反応という予想外の結果に終わったという。第1回目には元市長も登壇したと聞くと、山梨学院大学の江藤俊昭教授も「議場の意味を変えた。議場は市民と議員の議論のヒロバである！」と大絶賛している。

議会での市民の発言制度は何も犬山市議会が初めてではない。長崎県小値賀町議会では議員の一般質問に対して傍聴席から質問できる制度もあるし、名古屋市会でも市民3分間スピーチ制度はある。犬山市議会の嚆矢なのは、市民が議場で行ったフリースピーチをきちんと議会に対する提案として受け止め、のちに全議員で協議して良いものは議会からの政策提案として市長に提出することにある。

最後にピアンキ氏は「色んな議会で良いアイデアを出し合って、議会同士で善政競争しましょう」と投げかけられた。

議会はしばしばガラパゴス的進化を遂げるものだが、井の中の蛙で安住して茹で蛙になる前に外に出ないといけない。

■第2部：地域課題に対する新しい切り口を学ぶ

・「市民の関心と呼び込む 横浜自民党のマニフェストの取り組み」

古川直季(自民党横浜市会議員団団長・横浜市連政調会長)

横浜市会といえば「政策条例提案を行う議会」として有名である。4年間で15本の議員提案条例はまさに立法機関としての議会の面目躍如であると思う。その推進役が自民党横浜市会議員団である。

今回私はSDGsの目標を横浜市の政策(事業)に置き換えて設定していることに感銘を受けた。

例えば「貧困を無くそう」は「ひとり親家庭の自立支援」「こども食堂支援」であり、「住み続けられるまちづくりを」は「コミュニティバスの拡充」「用途地域の見直し」「空き家対策」というようにである。

SDGsには17の目標(ゴール)があるので、全てそれに対応するように設定がしてある。

これは西脇市でも参考にしないとイケない。西脇市総合計画ではSDGsに対しては取組むことが書いてあるが、具体的にSDGsの目標に対してどうするかは書いていない。事業単位での落とし込みが必要だと思う。

・「人口減少時代の水道事業」

福田健一郎(EY 新日本有限責任監査法人、インフラストラクチャー・アドバイザリーグループ)

水道事業は先日法改正もなされ、コンセッション方式や広域化がますます進んでいくものと思われる。老朽化対策、人口減少、節水意識等々でこのままの状態での水道事業維持は困難と見られている。試算によると90%の自治体で平均36%程度の値上げがされ、水道料金月2万円というような自治体が出てくることも予想されている。

今は民営化(コンセッション方式)悪玉論が席卷しているが、誇張されている部分や不正確な情報に流されることだけはしないようにしたいものだ(別に民営化論者ではない)

今後は直営維持、広域化、民営化(コンセッション方式・官民連携)の選択肢を迫られる時が西脇市にも訪れるだろう。

・「総括・新時代の善政競争のあり方 ～多様性に満ちた地方自治とは」

北川正恭(早稲田大学名誉教授)

北川先生の話で一番印象に残ったフレーズが「議会改革をやっていない議会ほど、もう十分だと感じ、やっている議会ほど、もっとしなければならぬと感じている」というものだった。これは議会を「議員」に置き換えても同じだろう。私も視察対応をしているとよくわかる。これは何にでもあてはまることだとも思う。「水面も眺めているだけでは魚は見え、魚が見えないから獲ろうと工夫することも考えない」ということである。

外に出ると自分がいかに足りないかを痛感する。